

# 令和6年度 鈴鹿市立深伊沢小学校 校内研修実施計画

## I 研究主題及び教科

研究主題	人とのかかわりを大切にし、主体的に学び合う子どもの育成 ～ちがいを大切に、聴き合い話し合う活動を通して～
教科・領域	全教科・全領域

## II 主題設定の理由

### 1. 子どもの実態

子どもたちは、素直で人懐っこく、何事にも真面目に取り組もうとする子が多い。学年によっては、言動にやや幼さが見受けられる子どもたちもいるが、全体的にどの学年も落ち着いた学校生活を送っている。欠席者数も大変少なく、心身ともにのびのびと健やかに育っている。学習面においては、与えられた課題に対して一生懸命取り組むことができる子が多く、生活面においても、自分の仕事に責任をもって取り組み、自分のため、友だちのために行動できる子の姿も多くみられる。

本校は、単級校であり、1年生からクラス替えをすることなく、同じ学級の仲間と共に成長をしていく。そのため、幼少期から子ども同士の固定化された人間関係や、新たな関係の構築が難しい実態があるため、普段から集団登下校を行ったり、異学年交流活動の場として縦割り班活動を取り入れたりしながら、全校の子どもたちとのつながりを深めてきた。

一方で、難しい課題・問題と出あったときや友だちとトラブルになったときなどでは、主体的に問題を解決しようとしなかったり、途中であきらめたり、困り感を出すことができなかつたりする子がいる。また、失敗や間違いに抵抗感を示す子も多く、消極的な様子が見られる。話し合いの時間を設定しても、何をどう語ってよいのかわからず黙り込んだり、相手と異なる意見を言うことに臆してしまったりすることもある。さらに単級校ということで、地域柄、多様な考えに触れる機会が少なく、異質なことに對して抵抗感が強く、多様な価値観を許容することへの弱さが見られることもある。さらに、コミュニケーション不足が良好な人間関係づくりの妨げとなる実態も見えてきている。また、非認知能力アンケートでは、自分には良いところがないと答える子もみられ、自己肯定感の低さに課題がみられる。

### 2. 今日的教育課題を踏まえた教育の方向性

社会の変化は加速度を増し、この激動する社会に対応していくためには、情報に振り回されるのではなく、子どもたちが自ら考え主体的によりよい解決方法を見出しながら、力強く生きていく力を身につけていかなければならない。そのため令和2年度より施行された学習指導要領において、「主体的・対話的で深い学び」の視点から授業改善を行い、「確かな学力」を育み、豊かな人間性を育成していくように示された。

さらに、学習指導要領では、各教科における「見方・考え方」を育てることや、筋道立てて考え、表現する力の育成が重視され、学校教育を通じて育成をめざす資質・能力を3つの柱で整理している。

- ① 知識・技能「何を理解しているか、何ができるか」
- ② 思考力・判断力・表現力等「理解していること、できることをどう使うか」
- ③ 学びに向かう力・人間性等「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」

各教科等におけるものの「見方・考え方」とは、「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」という各教科ならではの物事を捉える視点や考え方である。「見方・考え方」は「各教科を学ぶ本質的な意義の中核をなすもの」であり、それぞれの教科の「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の育成を通して磨かれていくものであるといえる。各教科等における学びの過程で子どもたちは、概念を獲得したり、思考力を発揮させたりしながら、資質能力を育てていく。知識を関連づけて深く理解したり、考えを形成したりしていくその過程で物事を捉える視点や考え方も鍛えられていく。こうした各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を学ぶ中で鍛えられた力を働かせながら、世の中の様々な物事について理解・思考し、よりよい社会や自らの人生を創り出していけると考えられる。さらに、子どもたちが様々な課題に対してよりよく解決をするには、どう考えたらいいのかと自分事として捉え、主体的に学ぼうとする力を身につけることが重要である。どんな点から対象を見るのかという視点と、どう考えたら課題を解決できるのかという考え方を身につけるために、主体的に学び合えるような授業づくりを行うことが必要である。

### 3. 昨年度の成果と課題

コミュニケーション力の向上をめざして、「コミュニケーションの基盤となる力」について設定し、全教科・全領域の活動で研修を進めてきた。その中でも、学習形態を工夫したり、しっかりと相手の思いを受け止めようと耳を傾けて「聴く」ことを中心に授業を行ったりした。その成果として、各学年部の目標である「聴く力」は徐々に定着しつつある。しかし、子どもたちがコミュニケーション力を十分に身につけられたとはまだまだ言い難い。また、多様な学習形態を取り入れるだけでは、学習効果を高めることができないという課題もみえてきた。

2021年度から研究内容に取り入れた、全教育活動におけるめあてとふりかえりに重点をおいて取り組んだことで、「活動のゴール」が明確になり、児童が目的意識をもって主体的に授業に臨む姿がみられるようになってきた。目的意識が明確になることで「知りたい」「分かってほしい」「使いたい」という気持ちが向上したり、特別な支援を要する子どもたちにとっても見通しがもてるので落ち着いて授業に向かえたりする効果がみられた。また、高学年で ICT 機器を有効活用した協働学習にも取り組み、学習課題や学び方等子どもが自己決定できる幅を広げることで主体的な活動につながった。しかし、まだまだ統一した取り組みになっていないため、活用するスプレッドシートやルーブリックなど教師間の認識をそろえ、学年に応じた取り組みを進めていく必要がある。

以上1. 2. 3のことから、今年度も全ての教育活動の中で、自他ともに尊重できる仲間づくりや授業づくりを進める中で、自ら考え、ちがいを認め合い、人とのかかわりを大切にしながら主体的に学び合おうとする子どもたちを育てたいと考え、上記の主題を設定した。

### Ⅲ 研究構想図

#### 【学校教育目標】

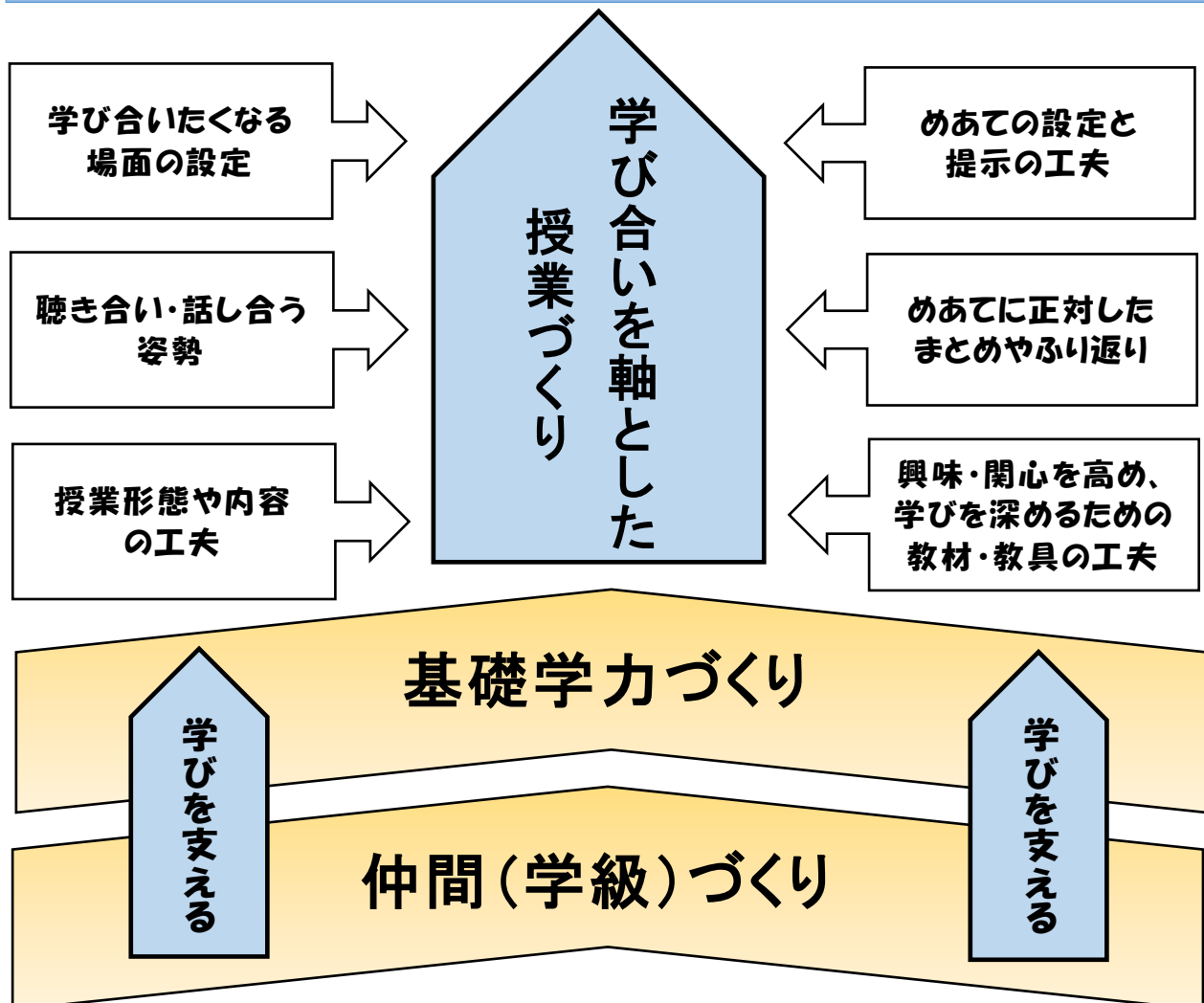
人と人とのつながりを大切にし、  
豊かな心でたくましく生きる子どもの育成

#### 【めざす子ども像】

- 自分の思いや考えを持ち、進んで学ぼうとする子ども 「知」
- 人とつながりを大切にし、思いやりのある子ども 「徳」
- 自分や他の人の生命・健康・安全を大切にする子ども 「体」

#### 【研修主題】

人とのかかわりを大切にし、主体的に学び合う子どもの育成  
～ちがいを大切に、聴き合い話し合う活動を通して～



## IV 研究内容及び方法

### 1. 学び合いを軸とした授業づくり

学び合いを軸とした授業づくりにおいて、聴き合い、話し合う関係性の構築は不可欠である。聴き合い、話し合う関係性を構築することは、他者が何を伝えたいのか、他者の思いや考えから何を学ぶのかという他者を意識した学びにつながっていくからである。そのことが自他との考えを比べながら多面的・多角的に思考することになり、主体的な学びになると考える。そのために、本校が継続して取り組んでいる「聴く」ことをコミュニケーションの基本にすえた授業づくりを今年度も進めていく。コミュニケーション力は、一方通行ではなく、相手を受け入れること、他者から学ぼうとする姿勢から始まる。それは、まず「聴く」ことによって、自分とは異なる考え方や価値観をもった他者から学ぶことができるからである。学びは、新しい環境や価値観との出会いと発見によって作り出されるものである。新たな学びを生むためには、分からないことへの挑戦や異なる考えのすり合わせが必要である。そのため、授業には、分からないこととの出会いや、多様な考えとの出会いの場面を意図的につくっていくことが重要となる。

児童一人一台端末となり、ICTも最大限活用しながら、多様な子どもたちを誰一人取り残すことなく育成する「個別最適な学び」と、子どもたちの多様な個性を最大限に生かす「協働的な学び」の一体的な充実が図られることが求められている。協働的な学びを取り入れることによって、学習意欲の向上や発想力・自信・対人能力などの強化が期待できる。子どもたちがお互いに支え合い、話し合いながら学習することで、自分の考えが変わったり深まったり広がったり、承認欲求が満たされたりする。昨年度から中学校区内でICTを有効活用した協働的な学びに向けた取り組みを進めている。今年度も高学年を中心に協働的な学び（課題設定、情報収集、整理・分析、まとめ・表現）を進めていく。また、低学年から協働的な学びに向けての素地をつけていく。

そして、ここで大切にされなければならないのは、分からないことを「わからない」と言える子どもやちがいを大切にできる子どもを育てることであり、それを臆せず言える関係をつくることである。子ども同士が協働して学んでいくには、仲間の言葉にきちんと寄り添い、最後まで付き合うことのできる関係づくり（学級づくり）が何より大切であると考え。そして協働して学ぶことにより、自らの考えを改めたり、広めたりしながら学びを深めていく。

また、子どもたちが主体的に学ぶための原動力となる「興味・関心」や「気づき」を引き出すために、めあての設定と教材の工夫にも重点をおく。そして、様々な課題に対して、どのような角度から対象を見るのかという視点と、どう考えたら課題をよりよく解決できるのかという考え方を身につけるために、主体的に学び合えるような授業づくりを行うことが必要である。

#### (1)【聴き合い・話し合う活動の工夫】

聴き合い、話し合う関係性を構築する具体的な方策として、まずはその価値づけが重要であると考え。例えば、聴き合うことの価値は、他者の考えや思いを聴くことで物事を多面的・多角的にとらえることができ、自分の考えを広げることにつながっていく。また、感想や意見をもちながら聴くことで、児童集会や様々な場面で誰もが感想を発表できるようにする。

話し合うことの価値は、互いの思いや考えを大切にし、新しいアイデアを創

造したり、自己有用感を高めたりすることにつながっていく。このように聴き合い、話し合うことの価値づけを日々子どもたちに伝えることで、学び合う関係が築かれていくと考える。

### ① 学び合いたくなる場面の設定

・子どもたちが主体的に「聴きたい」「話し合いたい」と思えるような場면을各学年の実態に応じて意図的に設定する。新たな気づきや疑問をもてるように工夫をする。

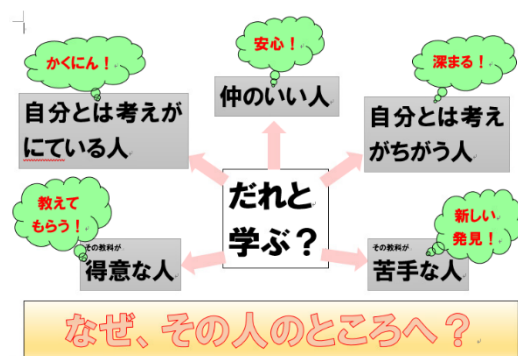
### ② 授業形態や内容の工夫

・学年やつけたい力に応じて、多様な学習形態を工夫し、必要な場面や指導内容に応じて取り入れ、学習意欲を高めながら深い学びにつなげる。

- ・個別学習、ペア学習、グループ学習、一斉学習
- ・協働相手を自由選択

- ・仲のいい人（安心）
- ・自分とは考えが似ている人（確認）
- ・自分とは考えが違う人（深まる）
- ・その教科が得意な人（教えてもらう）
- ・その教科が苦手な人（新しい発見）

各教室に「だれと学ぶ？」を掲示し、子どもたちに意識づけをさせていく。



・多様な学習形態のねらいを明確にして、学習効果を高める。

- ・自分の考えを確かにして深めるために（自信）
- ・他の考えに気づき、思考を広げるために（ヒント）
- ・みんなで考えを練り上げるために（練り上げ）
- ・考えの相違点・共通点を聞きあうことで思考を深めるために（比較）
- ・考えを出し合い協働して解決するために（協働）
- ・新たな考えを創り上げるために（新たな発想）
- ・よりよいものを選択するために（取捨選択）

### ③ 聴き合い、話し合う姿勢

- ・名前を呼ばれたら「はい」と返事をして立ち、いすを入れて話す。
- ・順序よく、理由をつけて、聴き手の反応を確認しながら話す。
- ・話し手の方を見て、反応しながら聴く。
- ・自分の思いや考えと比べながら聴く。
- ・「声のものさし」、「聴き名人」、「話し名人」、「だれと学ぶ？」の掲示を活用する。
- ・ホワイトボードや ICT 機器を使ったり、具体物を使ったりして発表の仕方を工夫させる。

本校でめざすコミュニケーションの基盤となる力

1・2年	3・4年	5・6年
<p>■ 聴く力 話している人の方を向いて、終わりまでしっかりと聴く。</p>	<p>■ 聴く力 自分の思いや考えと比べ、大事な事を落とさないようにうなずきながら聴く。</p>	<p>■ 聴く力 共通点や相違点を考え、内容を正確に理解しながら、反応して聴く。</p>
<p>■ 話す力 自分の思いや考えを理由づけてはっきりと話す。</p>	<p>■ 話す力 自分の思いや考えを相手に伝わるように、順序立てて内容を整理しながら話す。</p>	<p>■ 話す力 目的や場に応じて伝え方を工夫し、互いの立場を尊重しながら、自分の思いや考えを的確に話す。</p>
<p>■ 書く力 順序を整理して、自分の思いや考えを正しくていねいに書く。</p>	<p>■ 書く力 自分の思いや考えをつなぎ言葉や適切な用語を使って書く。</p>	<p>■ 書く力 自分の思いや考えを適切な用語を用いて簡潔に、筋道立てて整理して書く。</p>

き めいじん  
聴き名人

- あ あいて み 相手を見て
- い しせい いい姿勢で
- う うなずきながら
- え えがお 笑顔で
- お お 終わりまで

はな めいじん  
話し名人

- か ことば かんたんな言葉で
- き こえ きこえる声で
- く クラスのみんなを み 見て
- け けつろん 結論から
- こ ことば き 言葉づかいに気をつけて

(2) 【めあての設定とふりかえり】

子どもたちが授業の中で主体的に活動するためには、導入時のめあての提示にこだわるのが重要である。授業の中で、何を学ぶのか、何を解決すればよいのか、一人ひとりが具体的な見通しをもつために、まとめやふりかえりに正対するめあての設定をしていく。本校では、全教育活動における「めあて」「まとめ」「ふりかえり」について以下のように捉えている。

### めあて

教師のねらい（本時の目標）を子どもたちの立場で示したものの。具体的には、つけたい力を身につけさせるための、めざす「活動のゴールの姿」や「ゴールとそれまでの道筋」のこと。

### まとめ

本時のめあてに対する答え・結論のこと。

### ふりかえり

授業後、めあてに立ち返り自己評価を行うこと。学んだことやわかったこと、またはわからなかったことや問題意識など次時につなげられるようにする。

#### ① めあての設定・提示について

- ・ 本時の目標にそつためあてを提示する。
- ・ 子どもたちが目的意識をもち、主体的に活動できるようにめあての設定を工夫する。
- ・ 新たな発見や見方・考え方が広がるようなめあての設定をする。
- ・ 子どもの言葉によるめあての設定をする。

#### ② めあてに正対したまとめやふりかえりについて

- ・ めあてに正対したまとめやふりかえりにするために、授業のゴール（ふりかえり）を明確にしてから、めあてを設定する。
- ・ 子どもが自らの伸びを実感できるように、本時の学びをふりかえることができる時間を確保する。
- ・ ふりかえりは、学年の実態や単元に応じて、書かせたり、発表させたり、適用問題に置き換えたりするなど、柔軟に対応していく。
- ・ 友だちの考えや態度を認めあう場面を設定する。
- ・ 各学年に応じて、クロムブックを活用したふりかえりを取り入れていく。

#### (3) 【興味・関心を高め、学びを深めるための教材・教具の工夫】

- ・ 各教科の特色を生かし、実物や ICT 機器を活用するなど子どもたちの意欲が高まる教材教具の工夫を行う。
- ・ 子どもたちの実態を十分に把握し、活動の場、かかわる人、活動する用具など、学習効果が高まるように工夫する。
- ・ 子どもたちが見通しをもてるように、各学年に応じて、授業の流れをクラスルームなどで提示する。
- ・ 主体的な学びを引き出すために、ループリック（評価規準）を提示する。

## 2. 学びを支える基礎学力づくり

基礎学力は、学習の成立を可能にする基礎的・基本的な知識・技能であり、身につけていないと学習習慣や学習意欲を損なうことにもなりかねず、この定着は必要不可欠である。日常的にその向上を図り、自信をもって学習に臨めるようにしていく。

### (1) 【モジュール学習（朝10分間）】

- ・「国語」の時間とし、1限（50分間）分に充てる。

### (2) 【プリント学習（年3回）】

- ・学習ボランティアを効果的に活用して基礎基本の定着を進める。
- ・計算問題、基礎・基本的な問題、授業の補足的な問題など、担任が児童の学習状況を見て、問題を準備する。
- ・プリント学習の取り組み方について、全学年で共通理解をする。

#### 【方法】

- ・年3回（水曜日5限目）奇数学年、偶数学年で取り組む日を分ける。
- ・その日に取り組む課題の選定は担任が行い、配膳台等に並べておく。
- ・T-V体制をとっている。学習ボランティア（V）は丸付けに専念してもらい、教師（T）は支援の必要な子どもに関わり、個に応じた指導を行う。
- ・子どもは学習ボランティアに「見て下さい」や「お願いします」等挨拶をし、丸付けをしてもらう。まちがいがあれば直す。仕上がれば次の課題に進む。
- ・プリントが終わったら、ミライシードに各自のペースで取り組む。
- ・子どもは個人ファイルを持ち、1年分をファイリングする。ファイルは次年度に引き継ぐ。

### (3) 【家庭学習の定着】

- ・各家庭の協力を得ながら、鈴峰中学校区の学校と連携して取り組みを進める。
- ・「学年×10～15分」の家庭学習に見合う学習内容や方法を子どもたちに提示する。
- ・全体研修会で、家庭学習の取組についての交流と共通理解を図る。
- ・「家庭学習の手引き」を作成し、4月の学級懇談会の際に配付する。
- ・毎学期1週間の強化週間を設け、チェックをする。

### (4) 【全国学力・学習状況調査や、みえスタディ・チェックの実施】

- ・結果からみられる成果と課題をふまえ、学力保障・向上のための取り組みを具体化する。
- ・全職員で問題把握と自校採点を行い、出題されている問題の傾向を知る。
- ・正答率の低かった問題について研修部で児童の解答傾向を分析した後、全体研修会において課題克服のための手立てについて話し合い、各学年の実態に応じた指導の改善に努める。
- ・市教委の行う学力向上の研修会・鈴峰中校区学力向上連絡会議での各校の取組について情報共有する。



### 3. つながりをもつ仲間（学級）づくり

一人ひとりの居場所があり、子どもたちが安心して自分を出せる学級・学校づくりが本研修を進めていくにあたって大変重要になってくる。子どもと子どもをつながりをもつ「仲間づくり」を進めるために、まずは教師と子どもがつながることである。教師が子どもの思いや願いに寄り添い、いかに共感できるかが鍵となり、教師の人権感覚が問われるところである。各学級では、「見つける子」を設定し、その子を中心とした仲間づくりを進めていく。

#### (1) 【子どもたちの実態を把握】

- ・学級の人権課題をとらえ、子どもたちの実態把握に努める。年2回の「子どもの生活を語る会」（7月・3月実施）でレポート交流会を行う。
- ・各学期に1回いじめアンケートを実施し、人権課題について早期発見に努め、全職員で共有を図り、解決に向けて取り組む。

#### (2) 【関わり合う活動】

- ・異学年交流活動（縦割り班活動）を通して、主体的に関わりをもとうとする力を養う。①②③④
- ・委員会やクラブ活動など集団の一員としてよりよい学校生活づくりに積極的に参画し、自主的・実践的な態度を育てる。また、活動報告など集会で発表することを目標にして取り組み、達成感を味わわせることで、関わり合う力を高める。①②③④
- ・年1回、人権集会を実施し、中学校区の取り組みを共通理解すると共に、日頃の学級や学校で見られる課題に向き合い、どうすればよりよい学校生活を送れるかについて考える機会をもつ。③
- ・外部講師やゲストティーチャー等を招いた様々な体験学習を取り入れ、興味関心・意欲を高めキャリア教育につなげる。④

## V 授業研究

授業公開することで各学年の風通しを良くし、教職員のチーム力、授業力を向上させることを目的として取り組む。

- ・一人ひとりの教師の思いや各学年の課題を共有し、子どもたちがコミュニケーション力を向上させながら学びを深める手立てや方法を協働で探る。
- ・授業提案日5日前までに事前研修会を行う。
- ・授業研究会当日、事後研修会を行い成果や課題を次の授業研究会につなげる。
- ・人権の授業研究を1本必ず入れる。

学年部公開	全教師が年1回以上の授業公開を設定。学年部以外でも参加できる人は参加。学年部で事後研修会を行う。
全体公開	学年部公開の中で、低・中・高学年で各一本の授業を全体公開とする。全員参加。全体で事後研修会を行う。

上記の形態に関わらず、適宜積極的に授業を公開・参観することができる。

## VI その他（学校教育全体で取り組む活動）

### 【言葉を育む活動について】

- ・全校で、朝の会のスピーチ活動に取り組み、スピーチの基礎的なスキルを高める。㊦㊧
- ・作文や短日記やふりかえりカードなどを書かせることで、思いを言葉で表す力を高める。㊦㊧
- ・学年掲示板には、観察カード・絵・俳句カード・各活動の新聞など子どもたちの作品を定期的に掲示し、日頃の活動の表現の場として活用する。各学期2回以上は更新し、他の学年への発信の場としていく。

### 【読書活動の充実について】

- ・朝読タイムを設け、読書量や語彙力を増やす。
- ・定期的に、読み聞かせ（ボランティア年10回程度）に取り組み、読書に親しむ環境づくりをする。
- ・図書委員会を中心に、各学期1回程度図書館まつりを行い、読書ビンゴ・お話クイズラリー・チャレンジ読書などさまざまなジャンルの本に触れるきっかけをつくる。
- ・巡回指導員によるブックトークや読み聞かせを行い、読書意欲を高める。
- ・共通学習教材と関連させて、並行読書に取り組む。

### 【非認知能力を育む活動について】

- ・「やりぬく力」㊦「自制心」㊧「自己肯定感」㊦「社会性」㊧の4要素について、授業、行事、日常生活等あらゆる教育活動の場面で取り組む。
- ・非認知能力を育む活動には㊦㊧㊦㊧マークをつけ、教師が意識をもって取り組ませる。
- ・新学期当初の学活で子どもたちに示し、個人の目標や学級目標づくりに反映させる。
- ・4年生以上でアンケートを実施し、教師による働きかけと子どもたちへのフィードバックを行う。
- ・ポジティブメッセージカードなどに取り組み、実践を積極的に校内で共有する。

### 【ノート指導について】

- ・ノートを書く時には下じきを使う。
- ・直線を引くときには定規を使う。（筆算を書く時も）
- ・書き間違ったときは消しゴムで丁寧に消す。
- ・1マスに1文字を書く。（小数点は罫線の上）
- ・行間をあけて見やすく、分かりやすく書く。
- ・日付、ページ、めあて（青）、まとめ（赤）、ふりかえりを書く。

### 【学習道具・学習規律について】

- ・筆箱は、授業の妨げにならない大きさのもので、1・2年生は箱型を使う。
- ・筆箱の中身は、えんぴつ5本（2BまたはB）、赤えんぴつ1本、青えんぴつ

1本、よく消える消しゴム1個、短い定規1本、ネームペン1本を原則とする。ただし、先に飾りの付いた鉛筆は、学校では使わない。

- ・友だち同士で、文具の交換をしない。
- ・文具には、必ず記名するか、持ち主が分かるように印を付ける。
- ・カラーペンは、担任からの指示があった時に、家から持ってきて使う。
- ・シャープペンシルの使用は、特別な学習形態（社会見学・修学旅行など）の時は使えるが、日常の学習では使わない。
- ・チャイムの合図で学習を始め、時間を意識して行動する。
- ・授業の終わりに、次の学習の準備をしておく。

## VII 年間研修計画

	時期	取 組 内 容
一 学 期	4 / 18、19 4 / 22 (月)	<全国学力学習状況調査・みえスタディ・チェック実施> 【第1回全体研修会】 ・昨年度の成果と課題、今年度の方向性、ICT研修
	5 / 13 (月)	【第2回全体研修会】 ・みえスタディ・チェック、学調分析
	5 / 29 (水)	【第3回全体研修会】 ・6年授業研究（事前研）
	6 / 10 (月)	【第4回全体研修会】 ・6年授業研究（5限目）
	7 / 23 (火)	【第5回全体研修会】 ・第1回子どもの生活を語る会（人権研修）
	8 / 28 (水)	【第6回全体研修会】 ・特別支援教育、学力調査の分析と改善策（PDCA）
二 学 期	11 / 11 (月)	【第7回全体研修会】 ・4年授業研究（事前研）
	11 / 18 (月)	【第8回全体研修会】 ・4年授業研究（5限目）
	12 / 18 (水)	【第9回全体研修会】 ・ICT教育、プログラミング教育研修会
三 学 期	1 / 29 (水)	【第10回全体研修会】 ・低学年授業研究（事前研）
	2 / 12 (水)	【第11回全体研修会】 ・低学年授業研究（全体研）
	3 / 3 (月)	【第12回全体研修会】 ・第2回子どもの生活を語る会（人権研修）
	3 / 5 (水)	【第13回全体研修会】 ・今年度の研修の反省と来年度の方向性

全国学力学習状況調査  
みえスタディ・チェック  
検査結果の分析

課題克服の取組  
学力向上計画の作成

結果分析